武田泰淳全集

第十七巻

武田泰淳全集

第十七巻

筑摩書房

武田泰淳　第十七巻
昭和五十四年六月二十日　増補版第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　関根栄郷
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式会社　三松堂
製本　和田製本工業株式会社

Printed in Japan　0395―72417―4604

第十七巻　目次

快楽……3
解説……柄谷行人……443
解題……455

小

説

11

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

快楽

両国橋の、赤黒い鉄の板と、鉄の柱、組みあわされた鉄材のあいだを、電車が走りすぎる。ひろびろとした隅田川の水面と、うすにごりした川向うの空が、白っぽく光って、柳をむかえる。

ふくれあがるほど湛えられた河水は、しめった感じが少しもしない。はち切れんばかりの元気、灰色の殺気のようなものが、金属的に光る水面から、たちのぼっている。

秋葉原の駅の、あの上下三つのコンクリートの高々とした階層を持った、異様なホームで乗りかえをしたときから、いよいよ、またもや川向うへ行くのだという、気がまえで胸がはずむ。あんまり明るい気持ではないが、さればと言って、それほど暗く沈んだこころでもない。

「ともかく、おれは、坊主なんだ」

何百回、何千回となくくりかえしてきた、植物的なつぶやきが、川風に吹きさらされて、穂さきをなびかせる。何も、今さらのコトではないのだ。

だがやはり、目黒川に沿った、狭い谷間の樹々の緑にかこまれた寺に、くすぶっているときと、こうやって川向うの江東組の寺院へ出かけて行くときとでは、おなじつぶやきにも、ちがったゆらめきがあるのだ。

「ともかく、おれは、浄土宗の大寺のお坊っちゃんだ」

背広にソフトで、法衣と白足袋のふろしき包を、かかえて行くときもある。黒の改良服の上から、インバネスをひっかけて行くときもある。若い坊さんであることを恥ずかしがって、かくすようにして吊革にぶらさがっているときもあり、きれいサッパリ「さあ、おれさまは坊主なんだ。どうとでもしてくれ」と、一分刈りの頭部に、念力をこめて立っているときもあった。

両国の駅を降りて、国技館の円屋根の方へ歩いて行く。両国駅のホームは、風とおしがよくて、吹きさらし、吹き

あげられる感じだ。そして、ホームに立つといつも目につくのは、四階建のホテルだった。

それほど堂々としたホテルでもなく、また、それほどチャチな安建築でもない。ホームの高さが、ちょうど四階の窓と向いあっている。午前の十時か、十一時、ホテルの窓はかたくとじられて、赤いカーテンがかかっている。たまたま開いている窓から、女中さんの、いやいやながらの後しまつの姿が見えることもある。窓の外へはみ出したカーテンだけが風にそよいで、室内の男女の姿は見えないこともある。どんな男女が、そこで、どんな楽しい一夜をすごしたのか、柳には想像もできない。「きっと、あそこの窓の内側には、今さっきまで、一組の男女がいたのだ。いや、まだあそこに現にいるのかもしれない」

俗悪でもなければ、上品でもない、赤みをおびたクリーム色の壁にはめこまれた、八つか十の小さな窓が、いつも柳に「おまえさんの知ったこっちゃないさ」と、冷たいそぶりを見せる。ホーム側は、ホテルにとっては明らかに裏側か横側かなのだから、路面には穢いゴミ箱があり、あぶなっかしい非常梯子があり、はげた壁があり、見られたくない側面だった。ことさら、見せつけたい意志などあるはずがないのに、「見せつけられた」ように感じるのは、柳の勝手だった。

一の橋、二の橋、三の橋と、順番に名のついた橋のうち、どの橋なのか、柳にはよくわからなかった。問屋の店や、倉庫や小工場の多い路を歩いて、二つばかり木橋をわたる。青黒い水は、よくもこれだけ人工的に染めたと、あきれるほど青黒い。そんな青黒いものの色は、いくら東京でも、このへんの河水のほかにお目にかかれない、毒薬じみた色なのだ。水の満ちひきは、かなりはげしいから、石垣や橋杭、河底の泥と小石と汚物までが、この特別な河水の色と、そっくり同じに染められているのが、よく眼につくのである。

一週間に少くとも一回、多いときは三回も、西方寺から電話がかかる。

「明日は、十時と二時と二つ法事がございますから、また御めんどうでも、若先生にわき導師をおねがいいたします」

光田の叔母の、ばかていねいで、いくらか浮きうきした声が、目黒の寺の電話口につたわってくる。

と言うことは、それだけ江東の寺院が、目黒の組寺にくらべ、景気がよい、いそがしいと言うことだ。なかでも西方寺の檀家には、綿布の問屋、新薬の製造業、ミシン針の販売元など、急に金まわりのよくなった商人や工場主が多いので、叔母は自然と張りきらずにはいられないのだ。

冬でも、うすい浴衣一枚、チョンマゲをのせたせきとりや、山賊あたまのふんどしかつぎが、つまらなそうな顔つきで、すれちがう。横綱の住宅があり、相撲部屋の稽古場があるからだ。

赤煉瓦の塀でかこまれた西方寺のぐるりは、すっかりアスファルトで鋪装され、左右にひらく西洋式の鉄柵の扉をひらいても、ほとんど石畳である。墓場くさい泥の匂いが、全くない。

もとは、この西方寺が「梁山泊」と言われたものだ。水滸伝の豪傑がたてこもった山寨のように、苦学生とも徒弟とも、玄関番とも居候ともつかぬ、坊さんのような書生ッポのような若者が、十人ちかくたむろしていた。

先代は女っ気なしの、独身の住職として、信者をあつめていた。男世帯のあらあらしさと、家族ぬきの清潔さの入れまじったふんい気が、寺ぎらいの宗教ずきを満足させて、先代には熱心なファンがついていた。

そのあとを受けついだ、光田の叔母と、その若い息子、今の住職、つまり柳の従兄は、気骨のおれる立場にあるわけである。

「まえの先生が、なにしろえらすぎたから。先生とくらべられちゃ、誰だって見劣りがするさ」

「光田の奥さんなら、何をやらしたってまちがいないけどな。小っぽけな貧乏寺から、急に西方寺に入ったんじゃ、はじめは大へんだろう」

「まア、おれたちで、秀ちゃんを立てて行くようにしなくちゃな。秀ちゃんは、あれでクソ度胸があるから大丈夫だ」

「これからは何て言ったって、若いもんの世界だよ。組寺の年寄り連中がうるさいこと言ったら、おれたちが声援してやりゃいい」

江東組は、二十、三十の若い住職が多い。そのため、五十、六十の住職のそろった目黒から川向うへ行くと、のんびりとした活気が、いかにも現代風にみちている。

現代風と言ったところで、なにしろ僧侶なのだから、現代風そのままと言うわけにはいかない。現代風になればなるほど、僧侶らしくなくなると言う、困った矛盾はハッキリしてくるわけであるが、ぬきがたい矛盾があって、世の中の変化につれて自分たちも変って行くわけにはいかないからこそ、かえって、「現代風」と言うものが、ほんの少し取り入れても目立つ事情もあった。

「現代好きの僧侶」と言うだけで、もう、おかしな話なのである。「現代」どころか、過去にしろ未来にしろ、「この世」「俗世間」「現世」が好きなようでは、何もことさら僧侶になる必要はないわけだ。

しかし、いくらかくしたところで「現世が好き」という気持は、あらわれてしまう。どうせ、あらわれるものなら、何もビクビクしてかくそうとしたりしない方がいい。僧侶も職業の一種だ、と割り切ってしまえば、こういう主張もなりたつのかもしれない。現世と密着している自分たちの現状を、あっさりさらけ出して、こだわらない点で、江東組の若い連中は徹底していた。

したがって柳は、両国橋をわたって西方寺の玄関をあがり、川向うの坊さんの仲間入りするたびに「現世の快楽とは、すさまじいもんだなア」と、感じるのだった。

「おれはまだ、快楽について、知ってはいない。人間の快楽にかんするかぎり、おれはまだ一人前どころか、半人前にもなっていやしない。広大無辺な快楽の、ほんの一かけらの、またそのはじっこさえ味わわないうちから、快楽から解脱する任務をもつ、特別の人間になるなんて。まだすっかり生きてもいないうちに、生きることは空しいのだの、ばかばかしいのだと決定してしまうなんて、実際ヘンなことではあるが。ゴータマ・シッタルタという、三千年も昔のインドの王子はたしかに偉かった。彼の悟りによれば、いわゆる快楽なるものは、実は迷いや誤解にすぎないのであって、たのしくもなんともない。むしろそれは、人間をしばりつける重荷なのだ。釈尊はたしかに、徹底した、うそいつわりのない、気持のいい奴だったにちがいない。おれは、釈尊も法然上人も好きだ。彼らのような人間がいてくれたと思うと、ホッとする。彼らの一生について、特にくわしく知っているわけではない。法然上人は、父親を殺されてもカタキを討たなかったそうだ。武士の子として、ずいぶん思いきった無抵抗主義者だ。とにかく、えばらないところがいい。宗教家のくせに、えばったり、押しつけてくるのは実際イヤなもんだ。さて、それにしても、今すぐ法然の教えにしたがうのは、むずかしいのだ。もう少し、待ってもらいたいのだ。もう少し、いろいろと体験したり、考えたりして……」

十畳、十二畳、十四畳の部屋を突っきり、廊下を折れまがって、奥へ入って行く。

秀雄は、いつも蒼白い顔をしている。目鼻だちのととのった顔面も立派だし、頭部も男らしく大きく張っている。しかし柳はいつも、この従兄の顔を一目みると、すぐ「神経のイライラしている、不幸な青年」の感じをうける。

柳が到着すると、

「ああ、どうも御苦労さん」

と、うれしそうに迎えるが、秀雄の表情には、責任者の緊張、「めったなことで他人に気は許すまい」という警戒のようなものがただよっている。

「ああら、さっちゃん。どうも、たびたびすみません」
と、叔母は、柳をたのもしがっていた。彼女はさかんに、命令を下す。
「あ、Mさん、お塔婆の方はどうなの。大丈夫ね。ドッと来て、まごつかないようにね。それから、本堂の方の入口、ザッとでいいから雑巾かけておいて。え？　どうして？　またHは、今日にかぎって。だめよ、一時間ぐらい手つだってくれたって、いいでしょ。そりゃ、学校も大切だけどさ。今日の法事は、一週間もまえからTさんの番頭さんが来て、書生さんにもって、金一封おいてったじゃないの。宝屋さんは、よくして下さるんですから、それだけのことはしなくちゃね。もらうときばっかりニコニコして、勤めるところ勤めなくちゃ困るわよ。どうしても出かけなきゃ、ならないのかどうか、Mさん、Hさんにきいてちょうだい」
「いいじゃないか」
と、秀雄は不機嫌に言う。
「Hだって、用があるから出かけるんだろう。仕方ないじゃないか」
「そうかい。だけど、出かけるなら出かけるで、奥へ挨拶に来てくれなきゃ困るよ。フラッと出て行かれちまったんじゃ、書生さんのお弁当は何人前ですかって、番頭さんにきかれたって、答えられやしない」
「ハア、それじゃア、Hにもそのように申しましょう。その方がいいですよ。今日の法事は特別なんですから」
奥の間の入口、唐紙の向うの廊下に小腰をかがめた院代のMが、とりなすように言う。
「そうしてちょうだいよ」
「待てよ。Hは学校へやれよ」
と、カンシャクの青すじを額にあらわして、秀雄は母にさからうように言う。
「お母さんが、あんまり口やかましく言うから、いけないんだよ。だからみんな、動こうとしなくなるんだよ」
「わたしは、お寺のためを思ってやってるのよ。そりゃ、前の先生の時代には、みんなゴロゴロして、大言壮語してりゃよかったかも知れませんよ。豪傑きどり、国士きどりで、大きなこと言って遊んでたんでしょ。今は、そうはいきませんよ。役にもたたない書生さんを、おおぜい養っとくわけにいきませんよ。お寺やさんは、お寺やさんらしく、お檀家を大切にしてやってかなきゃならないのよ」
「ちがうよ。ぼくの言ってるのは、そんなこっちゃない。お母さんには、ぼくの気持がわからないんだ」
「ハイ、ハイ、そりゃ、このお寺は、方丈さん（光田の叔母は、自分のひとりっ児を、こう呼んでいる）のものです

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

からね。方丈さんの方針どおり、やらなくちゃね。ハイ、それじゃ、Mさん。Hは学校へやってちょうだい。そのかわり、書生のお弁当は一つへりましたからって、番頭さんに、よく申し上げてね」

「ハイ、では、そのように」

院代は、唐紙をしめて立ち去る。

「さア、さア、目黒の若先生、コロンバンの洋菓子でもめしあがってちょうだい。早くから、すみません。コロンバンの奥さんが、特別にこしらえて下さったんですから、おいしいはずよ。ええと、ああ、そうだ。方丈さんの足袋がきていない」

と、叔母はいそがしく、ヨビリンを押す。

女中の松やが、北国育ちらしい、まっかな頬をしてあらわれる。

「足袋なら、持ってきておきましたけど」

「え？　ああ、これか。これなの、これじゃしょうがないじゃないの。このあいだ買ったばかりの、どうしたの」

「あの、それだけしきゃ、ありませんけど」

「これは、ひどいわ、これじゃ、しょうがない。すまないけど、松さん、いそいで買ってきてよ。あなた、方丈さんの文数（もんすう）知ってるでしょ。ハハア、これじゃア、しょうがないや、なんぼなんでも」

叔母はクスクス笑いをしながら、いそがしく小銭を、女中さんにわたす。小寺から連れてきた女中だけが、ほんとに彼女の心の許せる、腹心の部下なのだ。可愛い秀雄をまもるためなら、江東組ぜんぶでも敵にまわす覚悟が、彼女にはあるのだ。

「深川の叔母さんは、まったくけなげだなア」

他人の心理を理解したり、他人の悩みに同情したりする能力が、いちじるしく欠けている柳も、そう感ぜずにはいられない。

秀雄の三つのとき、叔母の愛する夫は死んでいる。それ以来、貧乏寺で、夫の老父母と、残された愛児を守りそだててきた。毎年のように水害に遭い、関東大震災では、やっとのことで焼死をまぬがれている。

もしも秀雄の父と、結婚さえしなければ、こんな苦労はしないですんだ才女なのである。

「肺病やみで、弱いとわかってるのに、大さわぎして結婚するから、バカなのよ」

と、柳の母は、妹の不幸にあまり同情していない。

「秀雄さんのお父さんは、器用人でね。色白の美男子だしさ。ヴァイオリンもひけるし、芝居だってうまかったしね。ハムレットをやったりしたもんだから、あのひと、すっかりほれちまったんでしょ。そうでなきゃ、アメリカへ連れ

てって、勉強させたいというアメリカの未亡人もいたのよ。そうしてれば、今ごろは、女社長ぐらいになれてたのよ。バカなのよ」

柳の母は、そうやって「わたしは、なんて幸運なんだろう。これからさきも、運がいいにきまってるわ」と、現在を自慢し、未来をたしかめるために、妹の不幸を利用するのであった。

母も、叔母も、西洋人くさい美女として、少女時代から騒がれている。ただ、柳の母の方が背が高くて、可愛がられる性格だった。

「しかし、いずれにせよ、二人とも女性なんだからなア。女性がそんなに、寺の経営にはばをきかすのは、ヘンなんじゃないかなア」

と、十九歳の柳は、どうしても考えずにいられない。

「ほんとは、女性が寺にいないことが、寺の清浄の証明みたいなもののはずなんだ。少くとも、明治初年までは、まちがいなく、そうだったんだ。明治政府が法律で、肉食妻帯をゆるしたから、寺に女がいて違法ということはない。しかし、それにしても、おシャカ様の教えの根本は、つまらない欲望からはなれろ、脱出せよということだった。女性というものが、男性より劣ったものだとか、わるい奴だとか、ぼくだって思ってやしない。しかし、女性が男性の欲望の対象、それも一ばん大物の対象であることはたしかなのだ。欲望があるからこそ、女性をそばにおきたいんだ。寺へ入れたいんだ。だから住職の妻が、かいがいしく立ちはたらいて、お檀家の世話をやいていると言っても、それは『欲望』が着物を着て、動きまわっているようなもんなんだ。それは、やっぱり何となく、恥ずかしいことなんじゃないだろうか。きれいな女、働きのある女、目立つ女であればあるほど、具合がわるいんじゃなかろうか。いくら善意と熱意で、寺のためにつくしても、男に欲望をおこさせる女が、寺にいることは、どこか根本のところで仏教精神に反するんじゃなかろうか」

そう感じている柳は、母や叔母との会話では、いいかげんな態度しかとれなくなる。さからう気も、共感するつもりも失せてしまう。

「ひとのほしがる物を、所有する者は、罰せらるべきである」

古代インドの集団生活で、仏教教団の長老たちが、きびしく弟子たちをいましめたのは、この戒律である。

盗人でも盗みたがらないほど、まずしい衣服。それが僧の着ることを許された、たった一つの衣である。少しでも良い布地、少しでも目をよろこばせる色、少しでも人の気をひく形をした法衣を、もつことは罪である。それも、着

たきり一枚でなければならない。ほかの一枚を貯えること、それはもうそれだけで、俗世間に対する妥協であり、聖なる集団に対する裏切りなのである。

とすれば、ひとのほしがる美女を所有することは、どんな寛大な「長老」も大目にみることのできない、大罪ではないか。

俗世の快楽（カイラク）から脱け出すことが、仏弟子たるものの快楽（ケラク）である。

「身心快楽にして、禅定に入るがごとし」

と、教えられた、あの「けらく」とは、俗人の熱望する「カイラク」と、正反対のものなのである。「カイラク」をほしがる者は、永久に「けらく」を得ることができないのだ。カイラクの密林をさまよい歩くことが、もしも極楽への前進であるとしたら、おシャカ様は、なぜ別に、精神的けらくのレールを、その密林に敷かせる必要があったのだろうか。仏教のレールを走る法の車のみが、救いの地に到達する「乗物」だと教えられているのに、車の窓の外の、欲望つまりはカイラクの花々に手をさしのべるとは、おかしい仕業ではないのか。

「宝屋の御隠居さまと旦那さまが、御挨拶したいと、申されていますが」

「ああ、そう、お早いのね」

と、叔母は急にいきいきと、腰をうかす。

「こっちはまだ、こんな恰好してるのに。松や、早くそこら片づけて。方丈さんは、よろしいのね、それで」

「よろしいのねッて、何がさ」

と、秀雄は、いそがしがる母を、わざとじらすように言う。

「いつだって、よろしいよ」

「そう、それならよろしいけど。このひと、かまわないタチだから困るのよ」

と、叔母は柳の方に言う。

しかし、叔母の言い方は、まちがっている。秀雄は若いに似あわず、気がつきすぎるほど、万事にソツのない若者なのだ。かまわないどころか、衣服のこと、金銭のこと、交際のことで抜け目など、ありっこないやり手なのだ。叔母はそれを承知の上で、うちの息子は欲がなくて、飾り気がなくて、茫漠とした大人物だと言うように仕立てておきたいのだ。

やがて院代に案内されて、宝屋の老夫人と当主が、うやうやしく入ってくる。

「宝屋」は、当主の代になってから新薬を発売して、大もうけした金満家であるが、もともと三代も前から有名な質屋さんなのだ。

小柄で色黒の主人には、才気走ったところは一つもない。御隠居さまを大切にする、平凡な養子のように見える。

老夫人につづいて、宝屋の主人はもっと低く、畳にこすりつけんばかりに頭を下げる。

「まア、まア、どうぞ奥へお入りになって。そこじゃ、なんですから、どうぞこちらへ。これ、このあいだ寄附していただいたお座蒲団でございますから。それから、さきほどは、みなの者に一々御丁寧に下さって、おそれ入ります」

老夫人は、叔母の到れりつくせりの応対に、よく調子のあったうやうやしさで、塗り盆にのせた、お布施をさし出す。

白い上質の和紙で包んだお布施は、宝屋のお経料と塔婆料、親族たちの塔婆料、女中さんや爺やさんへの心づけ、わき導師（その一人は柳である）や、よその寺から来る坊さんたちへの特別の御出勤料、方丈さまとその御母堂さまへの、お土産の包み金などで、つみかさなって、こぼれ落ちそうになっている。

お布施の紙づつみは、信徒たちの心がまえを、いろいろとあらわしたものだ。茶色の封筒に、ペンで金額を書いたのもあり、あわてて鼻紙にくるんで、なかの紙幣がすけて見えるのもある。半紙をつかうのがふつうであるが、宝屋のは、トリノコという厚地の和紙を、作法どおりにたたんである。包装だけ立派で、中身の貧弱なのは、華族さまのお布施である。宝屋のは、中身も包装も申しぶんがない。筆の文字も、個性をむき出しにしない達筆である。

羽二重の白衣をきた秀雄は、するどい神経を、ひろいひたいにかくしている。秀雄だって、そんなにうやうやしくされるのは、恥ずかしい、気持のわるいことなのだ。しかし彼は、決してしりごみしたり、ソワソワしたりしない。

「こちらが、目黒の若先生ですの。ああ、御隠居さんは御存じでしたわね」

「ハイ、存じあげております」

と、老夫人は柳にも、丁寧に挨拶する。

「姉とは、何度もお会いになっておりますわね」

「ハイ。あちらさまも、ほんとに上品でお綺麗で、お若くて。こんな立派な御子息が、おありになると、思われないくらいで。うちの者とも、よくおうわさしております」

「ええ、そうなんですの。子供みたいなところが、ありますでしょ。苦労しておりませんから、姉の方は。わたくしの方が、年上のようで」

「ハイ。こちらは、お母さまが菊五郎に似ていらっしゃるし、方丈さまは、羽左衛門がたでいらっしゃる。目黒様の方は、お母さまが羽左衛門がたで、御子息さんは菊五郎が

たでいらっしゃる。ほんとに、いつもどちらさまも、ほれぼれさせていただいておりますです」
「まあ、まあ、とんでもございません」
「いいえ。ほんとでございます」
と、宝屋の主人が口ぞえする。
「母は、それもあって、お寺さんへ来るのを、なによりの楽しみにしております」
「まあ、まあ、大へんでございますね」
そのうちに、江東組の若い住職たちが駈けつけてくる。一日に、二つや三つの法事がない寺はないし、寺参りの時間はどこでもかち合うから、みんないそがしそうにしている。
「秀ちゃん、このあいだはどうもありがとう。たすかったよ。うるさい爺さんでね。おれの書いた字じゃ、墓へ彫れねえって言うんだ。おれにはよくわからないが、秀ちゃんの字は、とてもいいそうだ。爺さん、喜んでた」
彼らは、仲間同士では、わざと乱暴な言葉をつかう。
「あたりまえだよ。ポンちゃんの字は、ありゃ字なんてもんじゃない。絵だよ。あれじゃ、お墓がおどりだしちまう」
「人ぎきのわるいこと、言うなよ。おれだって、手のスジはいいんだぜ。なあ、秀ちゃん。おれ、こんど秀ちゃんの書道のお弟子になったんだ」
「むだだよ。時間つぶしだ」
「来年は、お前さん。おれだって上野の美術館の展覧会に出すよ。文句をえらべば、いいんだよ、文句を。時代ですよ。時代と言うものを考えなきゃいけませんよ。昨日のポンちゃんは、明日のポンちゃんにあらずさ。君子豹変す、だよ」
「じゃあ、どんな文句を書けば、入選するのさ。テンショウコウダイジングウ（天照皇太神宮）かい。教育勅語かい」
「あんたね、今の時代をどういう時代だと思ってるの」
「そりゃ、もちろん、われらの時代だと思ってますよ」
「われらって、誰なのさ」
「われら、若者、青年の時代だよ」
「プフッ、あんた、それでも青年のつもりなの。いやらしいわね、ほんとに」
いらただしげに、叔母が縁側のガラス戸をしめて廻っている。近くのガラス工場から、白いものはなんでも黒くする、ひどい煙がふきおろしてくるからだ。
「たしかに、文句は大切だよ」
と、秀雄は、掛合をやっている二人に言った。
「文天祥の『正気の歌』を楷書で出すと、かならず買って

行く人があるからね」
「それみなさいゃ字ばかりうまくたって、だめなんですよ。字の表現する内容ですよ」
「じゃあ、南無阿弥陀仏か」
「そりゃ、だめ。それだったら、あんた、知恩院か増上寺の大僧正じゃなきゃ、通りませんよ」
「ナムアミダブツじゃ通らんかね、やっぱり。それじゃ、南無妙法蓮華経はどうなの。だめだろうな」
「ナムミョウホウレンゲキョウの方はね」
　秀雄は、柳の顔をチラリとすばやく見やりながら、注意ぶかく言った。
「案外、買って行く人がいるんだな。軍人だとか、右翼なんかに、案外、人気があるんだから」
「ふうん、そうかなあ。なぜかなあ」
　と、ポンちゃんは「坊や」のように邪気のない、大きな顔をかしげて言った。
「そうかなアって、あんた、わからないの」
　と、もう一人が自信ありげに言った。
「仏敵退散でしょ、日蓮宗は。やっつけちまうんだよ、気に入らない奴は。敵を討つんだろ、ハッキリしてるんだよ。今の世の中は、ハッキリしてなきゃだめなんだ」
「ナムミョウホウレンゲキョウの方が、いいのかねエ」
　と、ポンちゃんは腕ぐみをして、不安げにしている。
「ぼくらとしては、ナムアミダブツの方が正しいと思うけどね」
　と、秀雄はしずかに言った。
「悪人でも、善人でも、金持でも貧乏人でも、のこらず極楽往生させる。えこひいきなしに、人間ぜんたいを救ってやる。日本人ばっかりじゃない。南洋の土人も、支那人もアメリカ人もロシア人も、ナムアミダブツと一声となえさえすれば救われる。この方が、たしかに正しいことは正しいんだ。だけど、軍人や右翼は、これじゃ困るんじゃないかな」
「……ふうん、なるほどねえ」
「な、そうなんだよ。仏教で世界じゅうを救おうなんて、お前さん、京都の大僧正だって、増上寺の管長さんだって思ってやしない。できっこないんだよ、そんなこと。そうだろう。アメリカ人やロシア人に、ナムアミダブツって言えったって言う方がむりだよ」
　と、もう一人はポンちゃんに言ってきかせる。
「そりゃ、あんた、人間はぜんぶゴクラクへ行く。この考えの方が大きいよ。だけど日本人としてさ。日本がほかの国と戦争した場合だ。どうしたって、日本国を守らなきゃならない。日本人を勝たせなきゃならない。そうなれば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com